

# 海外の障がいアートに対する認識と現状 リサーチ2025

## イギリス



[Crip Arte Spazio](#)

## 目次

1. [サマリー](#)
2. [背景](#)
3. [現状](#)
4. [今後の展望](#)
5. [参照記事一覧](#)
6. [アーティスト紹介](#)

## 1. サマリー



[Disability Arts Online: What we do](#)

### 感じたこと

イギリスは、障がい者の権利運動・障がい者アート運動による法律の成立を達成した。だが、法律の効力の弱さが認識され、障がいを持つ人びとが主導する数多くの組織の設立につながり、アート関連組織もその中に含まれている。それらのアート関連組織は主にアート界の”主流”に変化を働きかけることを目指しており、障がい者アートのための組織ではなく、障がいを持つアーティストが”主流”に入っていけるように活動している印象を受けた。また、世界規模でアート界の変化の必要性への指摘もみられ、同国が先導役となりながらも、同じ形を押し付けるのではなく、各国が自国に合った形で変えていくことを期待している発言もみられた。

障がいを持つアーティスト側の動きは”主流”のアート界への変化を強く訴えているものであり、彼ら自身が”主流”に包摂されることを望み、そのアート界の変化の必要性は世界規模であることを認識している。

## 背景

障がい者の権利運動とそこから生まれた障がい者アート運動は、法律の制定等、影響力は確かにあったが、不十分であった

- (障がい者アート運動の成果について、当時運動に参加し、現在障がいを持つアーティストと関わるある人物に尋ね、回答として)「障がい者アート運動による障がいを持つ人に対する認識の仕方の変化を私は確信しています。時代遅れの障がいの医学モデルは大部分で姿を消し、障がいの社会モデルを人びとは”得て”いますが、(障がいの社会モデルの提唱者の1人が)”障がいを持つ人を置かせる場所”(家での隔離・施設入所・特別支援学校・福祉制度に頼る生活等)は実際には典型的な抑圧の1つであり、遺憾なことに、未だ広範に支配的である、と言及したことを忘れてはなりません。ですから、可視化は進みましたが、十分ではありません」。

そのためか、(アートに限らず)障がいを持つ人びとが主導する組織が現在多く存在しているようである

- Disability Rights UK: 障がいを持つ人びとにより主導・運営され、障がいを持つ人のために活動する組織(DPO)の先導役であり、皆のための包摂的な社会を目指した活動をする組織である。他のDPO・キャンペーンを行う政策提言者・イギリス全国の政府と共に活動し、障がいを持つ人の権利・恩恵・生活の質・経済的機会の向上のために地域・国家レベルでの変化に影響を与えることを目指している。
- Disability Arts Online(DAO): (人が持つ)機能の発揮に対する障壁を経験しているアーティストと鑑賞者のために活動し、そうすることで社会的改革の実現を行っている。創造力・つながり・(作品に対する)批評の強化による、障がい者アートと文化の支持を使命としており、障がい者主導の立場で支配的な解釈への挑戦に関した豊富な歴史を持つ。そして障がいを、個別化が可能な経験の交差(の結果)であると認識し、活動を通して、疎外された人びとの声が評価・理解される、彼らを力づける機会を創出している。

だが、現状として法律の効力は弱いため、障がいを持つ人びとは様々な面で困難を今も経験しており、アートに関しても、“主流”の変化のなさが指摘されている

- 障がいを持つアーティストの可視化がされていないことは広く証明されている。テーマ・対象・アーティストの点で、主要なイギリス人アーティストの作品の中に障がいとの関連性を持つものはほとんどなく、障がいに関連している場合、それは大抵、病状の視点で扱われている。イギリスでの障がい者アート運動は40年間にわたり、学芸員と芸術史の作家から対応・言及を避けられていた。学芸的用語と実践の

著しい欠如は、部門内全体での障がいを持つアーティストの可視性と障がいに対する認識に影響を与えている。また障がいを持つアーティストは、アート界のエコシステムで報酬・状態・機会の点で最も冷遇されることが多いことを認識している。その結果、多くのアーティストが障がい者であると自身を特定することを拒否し、(文化)施設/機関から重視されなくなる/外されることを恐れ、作品に関連して障がいについて言及することを拒否する人もいる。同時に、障がいが創造力の源となり、人間性と世の中での在り方について新たな対話を生み出す革新的で創造的な考えの発展を可能にしている、という見解を持つアーティストもいる。

## 現状

そのため、障がいを持つアーティストに対し、健常者が運営する”主流”の組織ではなくDPOが現在活発に活動しており、考え方が一致する場合、連携も行っているようである

- DAOは障がいを持つ人びとのアート・文化への接触・参加・創造への喫緊の重大なニーズに応えるため、創造プログラム・才能開発・アート・文化部門が構造的不平等に対応するのを、いくつかの特定の形で支援するために、部門開発に取り組んでいる。
- Unlimitedは作品の制作依頼・資金援助・促進を行っており、障がいを持つアーティストと協力し、彼らの今後の作品制作とキャリアの支援を行っている。世界を変え、世界に挑む、障がいを持つアーティストの並外れた(レベルの)作品の制作依頼活動を行うことを、文化部門全体が実施するまで同組織は続けることを誓っている。同組織は、障がいを持つアーティストに無制限であると感じてもらい、活動に対する障壁や(妨げとなる)規範を克服してもらうことを望み、活動の開発を続け、障がいを持つアーティストへの支援を強化するよう、新たな機会に柔軟に対応していくという。(同組織の責任者は)「私たちは、アーティストに障がい者アートを制作しなければいけないとは言っておらず、むしろ彼ら自身が制作したいものを制作すべきと伝えており、つまり、障がいや支障に関連性持つ作品であつたりなかつたりします」、と発言している。つまり、障がいを持つアーティストに”障がい者アート”の制作を求めてはいない。また、純粹にアートとしての価値に基づいた支援対象のアーティストを選考しているようである:「私たちは、何か私たちの重要な基準に共鳴し、制作依頼への選定基準を、強い意志と革新が示されている、障がいを持つ人主導(による)作品とし続け、それを私たちに応募してくるアーティストの中の僅かにしか制作依頼をしない理由としています」。
- Shape Artsは、障がいを持つアーティストと創造的な分野でのキャリアや鑑賞者としての参加に対して障壁を経験している人びとを支援するプログラムを行う。その支援により、障がいを持つアーティストだ

けでなく、アート関連者に影響を与え、障がいを持つ鑑賞者にも恩恵を与えることができる。

## 今後の展望

多くのDPOが今後、イギリス国内だけでなく世界規模でアート界の”主流”が変わる必要性に言及し、そのために、DPOは活動を積極的に続ける必要があるとした。現状、同国が障がいを持つアーティストに対する活動の先導役とみなされていることを認識しつつも、今後のイギリスのアート界の変化のモデルを他国が採用するのを求めるのではなく、あくまで参考とし、各国の状況に合わせた変化を望んでいた

- Unlimitedは、文化部門が障がいを持つアーティストへの制作依頼と協力を、最低でも健常者のアーティストへのそれらの件数と比例した程度に行うようになったら、活動終了の準備・解散する予定であるというが、同組織の責任者は、「Unlimitedは常に一時的な介入策として企画されてきたため、どこかで活動を終了させる必要がありますが、「使命を完遂した」と宣言できるには、もう5～8年かかると考えています」と述べた。
- 障がい者の権利のための活動家でもある、あるアーティストは、「私たちが障がい者アートを障がいを持つ人びとが障がいによる実体験に基づいて/関連して作成されたものと定義した場合、その定義に当てはまらない大変興味深い作品を制作している多くの障がいを持つアーティストの存在を認めることができ、私たちは今も、いわゆる”主流”での所蔵・展示での適切な紹介が実現するのを待っており、これは障がいを持つアーティストの創造性や革新性の欠如というより、”主流”の誤った認識によるものと言えます」と述べた。
- (イギリスのアートにおける障がいに関する調査グループは、障がいを持つアーティストの作品の展示会について議論し、その結果)展示作品の選定は、人びとの意見を生み出し公衆の選択を起こす、勇敢な行為であるという認識に至り、その行為の人びとの障がい/ニューロダイバージェント(ND)に対する認識への影響には、脱植民地化(多数派を中心に構築されてきた秩序・説明的言語の体制をどう解体していく)の促進が含まれるという結論に至った。また、学芸員の作業過程で、障がい/NDを生まれ持った固有性と認識するように変わるべきであるという考えに至り、私たちは脱植民地化を進め、障がいを持つというアイデンティティからアートを通した固有性を包摂する変化を検証するための展示会に向けた活動に取り組みたいという結論に至ったという。
- Unlimitedの責任者は、「私たちが持つ歴史は、私たちが素晴らしいスタート地点を持った意味し、それは世界的に極めて独自のものです。国毎に状況が違いますので、単純にこれまでのモデルを取り除き、(私たちのモデルを)世界的に埋め込みたいとは思いません。私は、私たちの国際的な最大の強みは、障壁を取り除くことが可能で

あり障がいを持つアーティストが成功できることを示すことができることだと感じています。個人的に、最も問題だと認識している”見方”は、障がいの慈善的モデルです。多くの国で今も、障がいを持つことが悲劇を意味し、障がい者にとって問題解決の唯一の方法は慈善活動に頼ることであるという考えが深く根付いています。その考えが、私たちを不憫な存在にさせ、たとえ善意であってもアートと障がいに関する介入策が社会的なものではなくセラピー的な目的を持つてる場合が多いです」、と述べた。

## 2. 背景



[All In: Home](#)

ドイツの調査報告書で触れた通り、イギリスの障がい者アートは、障がい者の権利運動の中で生まれたものである。その権利運動の発生自体は、イギリスの国柄/気質であるようである

- [...]イギリスの行動主義の歴史において障がい者アート運動は、重要な出来事の一つであり、それがアートの力が社会変革を達成することを検証する、国立障がい者アート作品保管・記録機関の設立に至った。

権利運動の結果、法律の制定がなされたが、その法律は不十分であった

- (執筆者が障がい者アート運動の成果について、Shape ArtsのCEO兼NDACAのプロジェクト責任者であるDavid Heveyに尋ねたところ、)彼は、「障がい者アート運動による障がいを持つ人に対する認識の仕方の変化を私は確信しています。[...]権利運動と同調したデモ活動により、人びとが持ち得る関連付けの打破を遂げました。時代遅れの障がいの医学モデルは大部分で姿を消し、障がいの社会モデルを人びとは”得て”いますが、[...] (障がいの社会モデルの提唱者の1人が)”障がいを持つ人を置かせる場所”(家で

の隔離・施設入所・特別支援学校・福祉制度に頼る生活等)は実際には典型的な抑圧の1つであり、遺憾なことに、未だ広範に支配的である、と言及したことを忘れてはなりません。ですから、可視化は進みましたが、十分ではありません」、と回答した。

ここで特筆すべき点は、そのためか、(アートに限らず)障がいを持つ人びとが主導する組織が現在多く存在しているようである。

- **Disability Rights UK**  
障がいを持つ人びとにより主導・運営され、障がいを持つ人のために活動する組織(DPO)の先導役であり、皆のための包摂的な社会を目指して活動する障がいを持つ組織である:「私たちは、他のDPO・キャンペーンを行う政策提言者・イギリス全国の政府と共に活動し、障がいを持つ人の権利・恩恵・生活の質・経済的機会の向上のために地域・国家レベルでの変化に影響を与えることを目指している」。
- **Disability Arts Online(DAO)**  
(人が持つ)機能の発揮に対する障壁を経験しているアーティストと鑑賞者のために活動し、そうすることで社会的改革の実現を行っている:「私たちの使命は障がい者アートと文化を、創造力・つながり・(作品に対する)批評の強化により、支持することである。2004年に設立したDAOは、アート部門の変革を支援するため、障がい者主導の立場で支配的な解釈への挑戦に関した豊富な歴史を持つ。私たちは、障がいとは個別化が可能な経験の交差(の結果)であると認識している。活動を通して、私たちは、疎外された人びとの声が評価・理解される、彼らを力づける機会を創出している」。
- **Unlimited**  
障がいを持つ人びとが主導し、障がいを持つアーティストと協力するために設けられた。
- **Shape Arts**  
障がいを持つ人びとが主導する組織であり、障がいを持つアーティストへの機会の提供・障がいを持つ人びとに開かれた存在にさせるための文化的施設に対する研修実施・参加型アートや開発プログラムの運営によって、障がいを持つ人びとのアートへの接触/体験/活動可能性の向上に取り組んでいる。
- **Arts Council England**  
創造と文化のための国家開発機関であり、イギリスとアイルランドの難聴を持つ・障がいを持つ・ニューロダイバージェントな人びとのための新たなアートへの接触/体験/を可能にする制度である”All In”を開発している: All Inが実体験を持つ人びとによって監督されるよう、難聴を持つ・障がいを持つ・ニューロダイバージェントなメンバーで構成される顧問グループの指導を受け[...] (イギリスのテレビ番組で初め

て障がいを持つ司会者となった)イギリスで最も影響力を持つ障がいを持つ提唱者の1人と認識されているAndrew Millerをイギリスの(障がいを持つ人の参加・学習・利用等の)機会の推進者として就いてもらった。

### 3. 現状



[Disability in British Art](#)

#### イギリスにおける障がいに対する全体的な変化

ドイツと若干異なり、障がいを持つ人びと(子ども)の進路は(アートに関わらず)全体的に選択肢が広いようだが、障がいに対する理解の欠如や法律の効力の弱さにより、困難が生じているという。

- (障がいを持つ若者に調査を実施し、)大多数の調査参加者は主流の高等教育機関に在籍していたが、[...]障がいを持つ学生のための支援設備や支援が限定的である大学が存在しており、そのために、障がいを持つ若者は家族や医療ケア提供者の近くに住むことを求められる場合があり、厚い支援を受けたと述べた参加者がいた一方、授業出席に困難を抱えたり授業前に資料の提供を求めたことで講師から怠惰である、と咎められた経験を持つ、障がいを持つ若者が何人かみられた。また、大学施設の利用可能性の問題に言及する若者もいた。

## 障がいとアートに関する状況

アート界でも”主流”の変化のなさを指摘する発言がみられた。

- アート界での障がいを持つ人びとは可視化されていないことは広く証明されており、障がいを持つアーティストに対する認識の変化の必要性を示している。テーマ・対象・アーティストの点で、主要なイギリス人アーティストの作品の中に障がいとの関連性を持つものはほとんどない。障がいに関連している場合、それは大抵、病状の視点で扱われている。イギリスでの障がい者アート運動は40年間にわたり、学芸員と芸術史の作家から対応・言及を避けられていた。学芸的用語と実践の著しい欠如は、部門内全体での障がいを持つアーティストの可視性と障がいに対する認識に影響を与えている。  
→多くのアーティストが障がい者であると自身を特定することを拒否し、(文化)施設/機関から重視されなくなる/外されることを恐れ、作品に関連して障がいについて言及することを拒否する人もいる。一方、障がい創造力の源となり、人間性と世の中での在り方について新たな対話を生み出す革新的で創造的な考えの発展を可能にしている、とするアーティストもいる。
- (障がいを持つアーティストは)アートの生態系で報酬・状態・機会の点で最も冷遇されることが多いことを認識している。

そのため、DPOが現在活発に活動しており、考え方が一致する場合、連携も行っているようである

- DAOは障がいを持つ人びとのアート・文化への接触・参加・創造への喫緊の重大なニーズ応えるため、創造プログラム((様々な要素が)交差した障がいの視点に基づくアート・文化の表現に関する創造的な内容を、独自の入手可能性を考慮したデジタル形式で発信)・才能開発(支援を求める障がいを持つアーティストに対し、アート部門でのキャリア開拓のためのスキル/能力と自信を与えることを目指したもの)・アート・文化部門が構造的不平等に対応するのを、いくつかの特定の形で支援するために、部門開発(障がいの実体験と専門家としての知識を活用し、利用可能性・包摂性・創造性が高い社会の実現のために他の組織と協力)している。
- Unlimitedは、「障がいを持つ人主導(による)作品の制作依頼・資金援助・促進を行っており、障がいを持つアーティストの今後の作品制作とキャリアの支援のため、彼らと協力している。私たちが協力しているアーティストは世界を変えている。[...]文化部門全体が実施するまで、障がいを持つアーティストの並外れた(レベルの)作品の制作依頼活動を行うことを誓い、これは世界を変え、世界に挑む[...]私たちはアーティストに、アート形式・構造・制度・地理的關係・技法・憶測でつながっていると感じてもらうようにはしたくない。私たちはアーティストに無制限であることを感じてもらい、活動に対する障壁や(妨げとなる)規範を克服してもらいたいと考えている。私たちは自身の活動を

開発していき、障がいを持つアーティストをより支援できるよう、新たな機会に柔軟に対応していく」と表明している。(同組織の責任者は)「私たちは、アーティストに障がい者アートを制作しなければいけないとは言うておらず、むしろ彼ら自身が制作したいものを制作すべきと伝えており、つまり、障がいや支障に関連性持つ作品であったりなかったりします」と述べている。従って、組織として、障がいを持つアーティストに「障がい者アート」の制作を求めてはおらず、また、純粹にアートとしての価値に基づいた支援対象のアーティストを選考しているようである:「私たちは、何か私たちの重要な基準に共鳴し、制作依頼への選定基準を、強い意志と革新が示されており、障がいを持つ人主導(による)作品とし続け、それを私たちに応募してくるアーティストの中の僅かにしか制作依頼をしない理由としています。私たちは、その選定基準が”並外れている”ことを実現させると考えています」。

- Shape Artsは、障がいを持つアーティストと創造的な分野でのキャリアや鑑賞者としての参加に対して障壁を経験している人びとを支援するプログラムを行っている。プログラムから、制作依頼・展示会・訓練/助言/指導等の学習型支援を通した障がいを持つアーティストの支援に開かれた、新たな形が示され、デジタル空間での新たな可能性を模索し、アート部門に飛び込むことに困難を経験している障がいを持つ人びとのための提唱活動を行い、創造的産業を顧問サービスで支援するのを続けていく。
- All Inは、イギリスとアイルランドで難聴を持つ・障がいを持つ・ニューロダイバージェントな人が、アート・文化イベントに出席(参加)する際の体験の質の向上を目指している。顧客と部門関係者との緊密な協力により、同制度は新たな鑑賞者が生まれ、予約手続きを簡素化し、ニーズに応えることで、全体的に参加者数の増加を図っている。

## 4. 今後の展望



[Unlimited: Home](#)

多くのDPOがイギリス国内にとどまらず、世界規模でアート界の”主流”が変わる必要性に言及し、そのために、DPOは活動を積極的に続ける必要があるとした。現状、障がいを持つアーティストに対する活動の先導役とみなされていることを認識しつつも、今後のイギリスのアート界の変化のモデルを他国に採用させることを求めるのではなく、あくまで参考とし、各国の状況に合わせた変化を望んでいた

- Unlimitedは、「国内・国外の文化部門を通して、障がいを持つアーティストが公平性を享受できる世界を創出したい。私たちは、アーティストがリスクを取り、休息し、成長する、勇敢に活動できる空間の創出によって、その実現を目指している。また、文化部門が障がいを持つアーティストへの制作依頼と協力を、最低でも健常者のアーティストへのそれらの件数と比例した程度に行うようになったら、私たちは活動終了の準備をし、解散するということがある。私たちは、失敗をすることもあり、そこから学んでおり、自身の失敗を(皆さんと)共有し他の組織も実践できるよう、最善策の検証を行うことを誓う」と表明している。

→だが、同組織の責任者は、「Unlimitedは常に一時的な介入策として企画されてきました、ですから、影響が正確に検証されるよう、どこかで活動を終了させる必要があります。ですが、使命は果たせたかと自問自答した時、答えは”ノー”で、[...]”使命を完遂した”と宣言できるには、もう5~8年かかると考えています」、と述べた。

- 彫刻家・障がい者の権利のための活動家で、2013年にアートと障がい者アート運動に対する功労に対して国から勲章を授与されたTony Heatonは、「私たちが障がい者アートを障がいを持つ人びとが障がいによる実体験に基づいて/関連して作成されたものと描写した場合、その障がい者アートの定義に当てはまらない大変興味深い作品を制作している多くの障がいを持つアーティストの存在を認めることができ[...]私たちは今も、いわゆる”主流”での所蔵・展示での適切な紹介が実現するのを待っており、これは障がいを持つアーティストの創造性や革新性の欠如というより、”主流”の誤った認識によるものと言えます」、と述べた。
- (イギリスのアートにおける障がいに関する調査グループが、)”視覚芸術・ギャラリー・所蔵作品における障がいの示され方の理解・解釈の、適用可能な学芸的な言葉と枠組みをどうやって生み出すことができるのか”という問いに対し、様々な関係者との議論の結果)学芸員が監督者から思想家・哲学者とみなし、[...]展示作品の選定は、人びとの意見を生み出し公衆の選択を起こす、勇敢な行為であると論じられ、それが人びとの障がい/ニューロダイバージェント(ND)に対する認識に影響するかを考察した。そして、脱植民地化(多数派を中心に構築されてきた秩序・説明的言語の体制をどう解体していく)と生まれ持ったの固有性の視点から障がい/NDに対する学芸員の作業過程を考察すべきという考えに至り、私たちは脱植民地化を進め、障がいを持つというアイデンティティからアートを通した固有性を包摂する変化を検証するための展示会に向けた活動に取り組みたいという結論に至った。
- (Unlimitedの責任者は、)”私たちが持つ歴史は、私たちが素晴らしいスタート地点を持った意味し、それは世界的に極めて独自のものです。国毎に状況が違いますので、単純にこれまでのモデルを取り除き、(私たちのモデルを)世界的に埋め込みたいとは思いません。私は、私たちの国際的な最大の強みは、障壁を取り除くことが可能であり障がいを持つアーティストが成功できることを示すことができることだと感じています; アート形式に依らずイギリスが生み出せる、最優秀アートの中での格付けは容易です。個人的に、最も問題だと認識している”見方”は、障がいの慈善的モデルです。多くの国で今も、障がいを持つことが悲劇を意味し、障がい者にとって問題解決の唯一の方法は慈善活動に頼ることであるという考えが深く根付いています。その考えが、私たちを不憫な存在にさせ、たとえ善意であってもアートと障がいに関する介入策が社会的なものではなくセラピー的な目的を持つてる場合が多いです」、と述べた。
- Frida Kahloはノルウェーの学者Per Koren Solvangによると、自身が障がいの慈善的モデルから離れようとしなかったようであり、台湾やインドの調査からも障がいの慈善的モデルを重視するアーティストが存在するように思われる。上記の通り、各国の状況が違うことは考慮すべきだが、イギリスでも障がい者の雇用状況は全体的に厳しい(最後の参照記事参照)中で、生計を立てるためにアーティストとなり、障がいの慈善的モデルが浸透しているために生計が立てられている場合はアートの価値/アート自体の価値はどうか。

## 5. 参照記事一覧

- [Disability Arts Online: About](#)
- [Unlimited: Home](#)
- [Welcome to Shape](#)
- [Disability in British Art](#)
- [All In](#)
- [Reflections on the Disability Arts Movement](#)
- [Disability Rights UK: About Us](#)
- [Life journeys disabled young people](#)

## 6. アーティスト紹介

- Nnena Kalu



- [Jason Wilsher-Mills](#)
- [Jo Longhurst](#)
- [Aisha Mirza](#)